

令和7年度 学校経営計画・学校評価シート

高知若草特別支援学校子鹿園分校

《高知県の教育の基本理念》	(1) 学ぶ意欲にあふれ、心豊かにたくましく夢に向かって羽ばたく人 (2) 郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人 (3) 多様な個性や生き方を互いに認め、尊重し、協働し合う人	学校像	○児童生徒が自己実現を達成できる学校 ○保護者が成長と発達を実感できる教育を行う学校 ○地域になくてはならない存在として愛される学校 ○教職員が仕事に誇りをもち、やりがいを感じる学校	目指すべき取組の概要	(1) 学校教育目標、教育課程、日々の授業のつながりを意識したカリキュラムマネジメントサイクルの確立による児童生徒一人一人の実態に応じた教育課程の編成 (2) 卒業後の自立と社会参加を見据えた教育の充実と豊かな心の育成 (3) 教員の専門性の向上と指導力の育成 (4) 児童生徒の命と人権を守る安心安全な学校づくりの推進 (5) 特別支援教育のセンターとしての支援機能や情報発信、保護者、関係機関等との連携による開かれた学校づくりの推進 (6) 学校教育目標の達成をめざし、やりがい、働きがいのある学校組織の運営と働き方改革の促進
《取組の方向性》	(4つの基本方針) ①「高知家」の全ての子どもたちが、急速に変化する予測困難な今後の社会を生き抜く力を身につけるための教育の推進 ②「高知家」の子ども誰も誰一人取り残さず、多様な背景・特性・事情等を踏まえた包括的な教育・支援の推進 ③「高知家」の誰もが、生涯にわたって学ぶことができる環境づくりと活動・取組の推進 ④「学校における働き方改革」、「チーム学校の推進・強化」、「教員等の人材確保に向けた取組」の一体的推進	児童生徒像	子鹿園を目指す児童生徒像 【自分から表現する子】考える子 表現する子 行動する子 (知)自ら学ぶ ○学ぶ楽しさを感じ、自ら進んで学習する意欲や態度を身につけた児童生徒 ○社会生活に必要な知識や技能、態度を身につけた児童生徒 (徳)意欲と調力 ○人や環境と積極的に関わり、自立(自律)し社会参加しようとする意欲を持った児童生徒 ○お互いを認め合い、思いやりの気持ちで協調、協力しようとする児童生徒 (体)健康、体力 ○卒業後も一人一人の持てる力を発揮し、将来にわたって豊かに生きるため、健康や体力、基本的な生活習慣を身につけた児童生徒		

《重点取組項目》 (評価 A:目標を十分に達成 B:ほぼ目標を達成 C:やや不十分 D:改善を要する)

取組のねらい【P】		現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容【D】	中間評価【C】	中間評価後の取組内容【P・D】	年度末評価【C】	学校関係者評価	見直しのポイント【A】			
学校設定項目	教育課程の質の向上	○教育実践の共有や蓄積による系統的な指導のための年間計画や単元計画を作成し、充実を図る ○児童生徒の実態に基づく各教科等で育成する資質・能力を踏まえた指導と評価の一体化を図る ①単元を通してつきたい力について、単元・評価計画を用いて共有できている。 ◆学習評価について検討が十分できているとは言えない。 ◆児童生徒の実態や状況にあった教育課程の編制が課題である ①評価の視点を明らかにした単元評価計画に沿った授業と振り返りを行う。【Ⅱ類の公開授業での協議100%、指定した教科のデータの確実な蓄積100%】 ①教育実践(単元評価計画表)の蓄積を継続するとともに、これまでのものを改善して実践を行う。 ②教育課程の見直しを行い、実態に応じた指導の充実を図る。【高等部の教育課程の検討】	①授業づくりや公開授業のツール(単元評価計画表、授業参観シート、公開授業まとめシート)に評価について明示及び活用し、指導と評価の一体化を図る。【研究部】 ①学校全体で見合う授業設定を行い、一人一人が学びを深め、実践に活用できる協議の柱を明示して協議を行う。【教務部・研究部】 ②実態把握を基にした個別の指導計画について、内容の質の向上を図る。【教務部】 ②児童生徒の実態に応じた教育課程の編成を行い、指導内容の検討を進める。【教務部】	B	①評価方法について、具体的な評価の規準をグループ研で検討し指導と評価の一体化を図る。 ①グループ研の内容と関連した協議の柱を検討し明示する。 ①話し合ったことを確実に情報共有できるように、書面や口頭での情報共有を図る。 ①児童生徒の個別の指導計画について、作成した中間評価をもとに、目標の設定や評価の仕方について、参考事例を挙げ、各学部で検討する。 ②新しく設定した教育課程について、シラバスの作成を進める。	①教科指導における自立活動の取り組みをグループ研で検討したり、公開授業を見合ったりして、教員間で共有、連携して取り組むことができた。 ①全体の取組となるように、グループ研の中で、教科の見方・考え方を踏まえ、その教科でつきたい力を共有することができた。 また、つきたい方から目標設定を行い、目標に対してどのような評価方法、評価規準を行っているかについても共有することができた。 ①高等部の教育課程の検討として、学校全体で見合う授業の事後協議では、グループ研のテーマと関連した協議の柱を明示して学校全体で協議を深めることができた。 【Ⅱ類の公開授業での協議100%、指定した教科のデータの確実な蓄積は小学部Ⅲ類で進んでいる】 ②個別の指導計画の目標の設定や評価の仕方について、対応できている教員も一定数いるが、全体で目標の設定や評価の仕方を共有することが難しく、中間評価や学年末評価から事例を挙げて各学部で検討することができなかった。 ②来年度は医療的ケア児が高等部に進学するため新しいコースができるほか、教科書を本校と合わせたため、高等部1年生のシラバスを再作成することができた。 【高等部の教育課程を検討し新たな教育課程の編成を行った】	B	教育課程の見直しや自立活動の指導において一定の成果が上がっている。 単元評価計画表について作成するプロセスは教員のOJTとして有効であるが、書くことが目的とならないようプロセスの簡略化など工夫が必要である。 教員が密に協議し、授業を改善しようとしている姿勢をもっと保護者にも見せてほしい。	単元評価計画表の項目を精選し、様式のスリム化を行うとともに、生成AIを活用した単元評価計画表の作成を検討する。 公開授業の事後協議の様子や協議した内容の要旨をすぐメールで発信する。 教務部が中心となって、個別の指導計画の目標の設定や評価について、全体で目標の設定や評価の仕方を見直し、中間評価や学年末評価から事例を挙げて各学部で検討する。		
	教員の専門性の向上・教育内容の充実	○キャリア発達を促す視点で授業づくりを行い、子どもの年間の重点目標を達成する ○自立活動と教科の関連性の理解と時間の指導の充実を図る ○個別最適化をめざすICTの効果的な活用を図る ◇自立活動について専門家の助言を参考にして指導内容の検討ができている。 ○教科等の指導の中でキャリアの視点を取り入れることが進んでいる。(Ⅲ) ◇ICTを使って学びやすくなった実感を持ってない児童生徒が2割程度いる。 ①児童生徒が学びを深めるために自身でICT等の使い方を選択できたための指導方法を学び、実践する。【児童の学びやすさへの実感が85%超】 ②児童生徒の実態把握をチームで行い共通して自立活動の指導に当たることができる。【自立活動の指導の充実への肯定的評価85%以上】 ③キャリアの視点を取り入れた指導を教科横断的にを行い、卒業後を意識した指導ができる。【教職員肯定的評価80%以上】	①児童生徒の思考を促し深める各教科等の授業づくりを進める。【研究部、教科担当(Ⅲ)】 ①教科の目標を達成するためのICTの効果的な活用についての研修計画・実施をする。【情報・ICT部】 ②発達についての理解を深め、グループで実態把握を進め、指導に活かす。【研究部・クラス(Ⅱ)】 ②自立活動について基本的な研修を継続、グループで協議する方法を工夫することで、流れ図及び指導目標の設定に活かす【研究部】 ③実態に応じ、子鹿キャリアプランに沿った指導を継続する。【進路・地域支援部】	B+	①Ⅲ類の授業の中で教科の後ろ支えとなる自立活動の配慮事項について共通理解を図ることができた。 ①月に1度自主研修を開催している。また、教員の専門性向上に向けた内容を選定しFigmaや生成AIの内容を1学期に取り扱った。 ①教職員がICTの活用につながるように相談に応じたり、自主研修を開催したりするなど、ICTの活用が拡大できた。 ②流れ図の作成が話し合いのもと作成できたが、取組の経過や課題については今後も検討が必要である。 ②Ⅱ類では、自主研修として、障害の重い子どものチェックリストについての自主研修を行った。Ⅲ類では、グループ研の中で流れ図の目標や課題をもとに自立活動の配慮事項について共通認識を図ることができた。 ③キャリアパスポートの実践を推進することができた。実態に応じて、高3の生徒は卒業後に向けて、1年間の進路計画をと一緒に立てることができた。 ③キャリアパスポートを作成し、生かすことができた。	②2学期以降もICT自主研修を行う。 ②2学期に「教科における自立活動の指導について」の演習を行い、学習上生活上の困難の背景を考える研修を行う。 ②グループ研などを活用し、流れ図をもとにした取組経過や課題を問わる教員で共有する時間を設定し共通理解を図る。 ②Ⅱ類型のキャリア発達段階表を見直し、子鹿キャリアプランの作成を行う。キャリアパスポートの様式を学部ごとに共有し、高等部の生徒個々に合わせたキャリアプランを担任と進路で共有し保護者との連携を円滑にする。また生徒にとってよりよい進路選択を行えるようにする。	B	①外部講師を招き、全校生徒で協力して創作活動を行うことができた。この実践を通して児童生徒が主体的に思考しながら活動できる授業づくりのヒントを得ることができた。 ①美術科の授業で、教科書の内容をふまえ、映像メディア(アニメーション)の分野の制作に取り組むなどICTを活用した学習ができた。 ①Figma等を利用して学びの履歴を残しながら、生徒の興味や実態に合わせた題材や方法で授業を行うことで、生徒の思考を深めることができた。 ①本校PTや外部のPT・STから児童の身体への支援方法を学ぶことができ、日々の取り組みに生かすことができた。 ①「教科における自立活動の指導について」の研修を行い、学習上の困難に着目して困難の背景や要因を考える演習を学校全体で行うことができた。 【児童の学びやすさへの実感が94.7%】 ②研究授業等の反省を活かしながら個々の実態を担任全員が把握し、情報共有しながら指導に生かすことができた。 ②自立活動の指導では、研修やPTからの助言を受け、保護者等と情報共有を行い、実態把握に努め、指導に生かすことができた。 ②本校在籍の学校PTが来校し直接アドバイスを受ける機会が増え、生徒の自立に向けた指導に生かすことができた。 ②研修等で教員の専門性の向上につなげることができた。 ②グループ研の中で、教科指導と教科の後ろ支えとなる自立活動の充実をテーマに、各クラス・生徒の困り感を共有し、全教科共通で意識する目標を立てることができた。 【自立活動の指導の充実への肯定的評価88.7%】 ③キャリアパスポートを作成することができたが、効果的に活用するための共通認識を学校全体で徹底するまでには至らなかった。 ③児童の実態に合わせ、総合的な学習の時間で「高知家まなびびこ」のタイピング練習を活用した取り組みを行い、児童が目標としていた全スクリプトが完了することができた。 【社会参加を意識した文化芸術活動の振興の肯定的評価92.1%、スポーツ活動の振興の肯定的評価90.4%】	B+	特色ある取組を通して、児童生徒の自己肯定感の向上に成果が表れている。 自立活動と教科の区別にごծわりずき、理論に偏りすぎている印象を受ける。難しく考えすぎず、児童生徒の興味を引き出すことを最優先してほしい。 なぜこの活動が必要なのか、保護者や関係機関に根拠をもって説明できる力を身につけてほしい。 ICTの活用について、端末を使うことを目的化せず、児童生徒の表現を補い、世界を広げる手段として定着させてほしい。 キャリア教育の視点に立って、教科や自立活動の指導が、卒業後の自立と社会参加にどうつながっていくかを意識した指導を行っている。	保護者とも目標や指導内容を共有するために、相談等で専門用語で説明するのはではなく、具体的なICTがあることで、今までできなかったことができるようになったというQOLを高める取組を進める。 外部講師からの助言を校民での指導に留めず、関係各機関と情報を共有し、指導に生かせるようにする。
キャリア教育の充実	つなげる教育力の向上	○子どもたちの豊かな生活につながる文化、芸術、スポーツ活動の充実を図る ○子どもたちの未来を支える環境教育を推進する。地域とのつながりを意識する ◇日々の取組を共有したり、情報提供することはできしており、文芸・スポーツや環境教育について意識ができている。 ◆対外的な大会や作品展への参加が社会参加への実感につながりとして評価できにくい。 ①授業の中で新たな文芸・スの取組を行い、児童生徒が興味をもったり社会とつながったりするきっかけづくりを続ける。【授業での新たな取り組み2事例以上】 ②「未来を支える環境教育」を児童生徒に学びの実感をもてるような指導を行う。【好事例の共有 2事例以上】 ③福祉避難所の指定に伴い、避難体験などを行い「防災への意識を高める。【教職員防災研修の実施】	①授業の中で新たな文芸・スに触れられるよう、各教科の取組を工夫する。【各教科、学部】 ①若草3校の取組や対外競技会などへの参加を推進する。【児童生徒部】 ②若草本校等の取組を学ぶ機会を作るとともに校内で紹介する。校内の好事例をGW、すてーる等のツールで共有し、実践を広める。(地域清掃等地域とのかわりについても取り組む)【環境教育推進教員】 ②「未来を支える環境教育」を児童生徒に学びの実感をもてるような指導を行う。【好事例の共有 2事例以上】 ③避難所運営マニュアルの策定、研修等により防災に対する意識付けを行う。【学安部】	B	①ジュニアボッチャ大会や障害者スポーツ大会への参加を全体、個々に呼びかけ、日頃の学習の成果を発揮して取り組ませることができた。 ①体育や自立活動にドローンを導入し、生徒が自分で活動する経験に役立てることができた。SDGsを主体とした活動が実施できた。 ①図画工作、美術科において「子ども県展」や「紙とあそぼう作品展」に向けた作品作りに取り組むことができた。 ③防災アドバイザーを招いて教職員対象防災研修を行い「防災意識の啓蒙を行う。専門家の意見や避難訓練の反省等を活かして危機管理マニュアルの改善を図り、教職員の防災意識を高めていく。	①今後開催される競技大会等への参加を生徒本人、各家庭に広く呼びかけ、事後には動画や写真を紹介することで、より多くの児童生徒の興味関心を高める活動に取り組む。 ①校内の実践を引き続き進めるとともに、好事例をすぐメールで発信、共有できるようにする。 ③防災アドバイザーを招いて教職員対象防災研修を行い「防災意識の啓蒙を行う。専門家の意見や避難訓練の反省等を活かして危機管理マニュアルの改善を図り、教職員の防災意識を高めていく。	B+	①美術科の授業でストップモーションアニメの作成に取り組み、アニメ作成の大変さを知るとともに、アニメ完成の達成感を得ることができた。 ①美術科の授業で作成した作品を「4校合同作品展」、「紙とあそぼう作品展」、「子ども県展」などに出品し、受賞することができた。 ①校外学習や修学旅行など校外での活動を実施し、事前事後の学習を通して社会とのつながりを意識させることができた。 ①図工や国語で制作した作品を様々なコンクールに応募することができた。 ①朝倉小学校と学校間交流ではボッチャを通して交流ができた。また、センターに入院している児童もリモートで居住地校と交流ができた。 ①全校集会やクリスマス会を通して、音楽や修学旅行のまとめ等の学習の成果を発表することで、意欲的に学習に取り組むことができた。 【新たな取組や今まで取り組んできたことを生かして、児童生徒が興味をもったり、社会とつながったりすることができた】 ②環境教育については、各教科の内容と関連づけて、エコの取組や食品ロス、資源の再利用や自然環境のしくみなど各学部の児童生徒の実態に応じて学ぶことができた。 【好事例を2事例以上共有することができた】 ③防災アドバイザーとして高知大学客員教授岡村眞氏に講師として来校いただき、防災研修を通して教職員への防災意識の啓蒙を図ることができた。 ③福祉避難所の指定にあたり、高知市からの備蓄品の保管をする場所を南倉屋上前の機械室に整備し、マニュアルの作成作業を進めることができた。 【教職員防災研修の実施1回】	B+	地域や施設を巻き込んだ活動が展開されており、積極的な外部との交流についても評価できる。 一人一人の身体状況に合わせた教員の工夫に感銘を受けた。スポーツが苦手な児童生徒でも楽しめるプログラムを今後も継続して提供したい。 防災及び福祉避難所の運営について、防災担当者を中心に被災した際のシュレージンや地域との連携について取組を進めてほしい。 分枝で制作された優れた作品をリモートやオンラインを活用して本校分校間で共有して発表する場を受けてはどうか。	作品展の出品だけでなく、デジタル作品を公開し外部からコメントをもらうなど、双方向のやり取りにつながる仕組みを作る。 児童生徒が取り組んだ環境に関する活動をすぐメールやClassroom等を活用して動画やスライドで発信する。 福祉避難所の指定に伴い、危機管理マニュアルの充実を図る。 ドローンやストップモーション・メイション、リモート交流など、ICTを活用した取組の事例を引き続き積み重ねていく。
	働き方改革	○効果的な教育活動を行うために、現状を問い直し業務の改善を進める ○自らの働き方に向き合うことで、生活の質を高め、教職人生を豊かにする ◇タイムマネジメントの工夫を行い、家庭とのバランスを考慮した働き方をする教職員は多い。 ◆警備開始時刻に対する意識が少ない。 ①タイムマネジメントを意識した働き方が増え、ワークライフバランスに対する意識が向上する。【肯定的評価90%以上】 ②業務改善について、新たに着手すべき点を出し合い、組織的に改善を行う。	①最終退庁時刻(繁忙期を除き)18時半とし、警備開始時刻に近づける。 ②授業や分掌等の取り組みを出し合うとともに、進捗状況を共有し、見通しの持てる組織づくりを行う。 (シートの見える化、データ共有など)【運営委】	B	①最終退庁時刻である18時30分にほぼすべての教職員が退庁できている。 ②授業や学習指導におけるICTの活用や授業準備の効率化には、各教員間で個人差がある。	①引き続きすべての教職員が18時30分までに退庁できるように声掛けを行う。 ②学部や教科指導の中で共有フォルダにある既存の教材を整理し効果的に活用する。	B+	①計画的に他の教員と協力して業務を行い、クラス内では業務を分担し、偏らないように調整しながら業務を遂行し、最終退庁時刻を守ることができた。 ①休憩時間や終業時間が明確に意識づけられているので、働きやすさにつながり仕事の割り振りにメリハリがついた。 【肯定的評価78.1%】 ②共有フォルダにⅢ類型の過去の教材をまとめたことで、過去の教材の活用が定着してきた。 ②業務について他の教員と取り組み内容を具体的に協議し、互いに声を掛け合いながら改善ができた。	B+	退庁時刻を守ることや、教材の共有など良い取り組みがなされている。 成果が見えにくい業務や慣例で行っている業務を思い切って簡素化する判断が必要である。 できて当たり前の高い要求水準をいったん見直し、今できる精一杯を認め合う寛容な職場風土を醸成することが必要である。 教員がやりがいを持って授業に向き合える環境づくりが必要である。	慣例で行っている業務を運営委員会で具体的にリストアップし、スクラップ&ビルドする。 業務の効率化を目指し、得意な人が苦手な人に教える情報・ICT系の自主研修を活用して、組織全体のICTスキルの底上げを図る。 警備員の18時30分施錠による退庁に加えて、事前の資料確認を行うことで会議時間を削減するなど、現場が働きやすくなったと実感できる取組を行う。
不祥事防止に向けた取組	○「不祥事防止委員会」の中で学校全体で不祥事根絶に向けた取組を強化する ○明るく風通しのよい職場づくりに向けての環境整備を行う(ヒト、モノ) ◇現状課題 ◇不祥事防止に対する意識は各自が目標設定シートに記載し説明するなどの取り組みにより高くなっている。 ◆働きやすさを求め各自が工夫をしている(76%)ものの、より良い職場の風土づくりを推進しようとする意識は弱い。 ○校内研修の実施回数 1学期に1回は実施(子どもの人権について、ハラスメント等3回以上) ○不祥事防止委員会の実施回数 隔月(追加が必要に応じて) ① 働きやすさや風通しのよさについての工夫を主体的に行える職場づくりを推進する。【教職員が講じた工夫を面談やアンケートで聞き取る】 ② 不祥事防止に向けて、校内のルールを策定し、校内の実情に応じた不祥事防止策を教職員全体で講じる。	①働きやすさの工夫について、情報共有するとともに、学部、職種が異なっても声を掛け合える職場になるよう、研修等のグループ編成を工夫する。【不祥事防止委】 ②不祥事防止に向けた校内ルールは、協議を重ね、年間を通してブラッシュアップさせる。【不祥事防止委】	B+	①風通しの良い環境づくりを意識して、普段から教職員間で声かけしながらコミュニケーションが取れている。 ②児童生徒の気持ちに寄り添った指導・支援に関する校内のアンケートを行い、結果を全教職員で共有することができた。	①働きやすさと職場風土の向上のために掲示板等を通じて情報を全教職員で共有する。 ①不祥事防止委員会による個人情報漏洩やハラスメントの研修を全教職員で行う。 ②不祥事防止の校内ルールを教員の意見を反映させ、より職場に使いやすしい形に改定する。	B+	①風通いの良い環境づくりを心掛け、適宜コミュニケーションをとり、情報共有を図って普段から風通しの良い環境づくりに全員が取り組んでいるが、教員間や学校全体での情報共有が十分できていないことがあった。 ①風通いの良い環境や不祥事を未然に防ぐ方策として、クラス会や学部会で児童生徒についての情報を共有することで、全員で協力して取り組むことができた。 【教職員が講じた工夫を校長面談の中で聞き取った】 ②今年度は不祥事防止に向けた校内ルールやそれに対する評価を全員で考える場を設定し、自分事として意識して取り組むことができた。	B+	教員自らが決めた校内ルールを守るという意識を高め、教職員が取り組んでいる点は評価できる。 日常の中で何が職場の居心地を良くしているかというポジティブな視点が必要である。 学校現場において、気になる言動や違和感を早期に共有する仕組みや組織を構築すべきである。 学校で働くことが楽しい、やりがいがある、正当に評価されていると感じられる環境こそが結果して不祥事を防ぐことにつながるので、今後も取り組みの継続は必要である。	教育の質を高めるために心理的安全性を確保するという観点から互いの良さを認め合う取組を進める。 不祥事防止研修に事例検討を取り入れる機会を増やし、教職員同士が対話する時間を確保する。	